

浜頓別町

食虫植物研究会会報

第1号

平成10年3月16日

絶滅の危機
食虫植物
~~~頓別原野~~~

## 浜頓別食虫植物研究会発足にあたって

1997年(平成9年)9月4日、食虫植物研究会会長小宮定志先生より「サロベツと頓別原野のナガバノモウセンゴケの保全に関するもので特に、頓別原野のものは絶滅寸前、風前の灯火で対策が緊急を要し、移植について十分に慎重な対応をお願いします。」の協力要請の連絡がありました。

浜頓別町頓別原野は、現在尾瀬沼湿原など日本の数カ所に自生している希少な食虫植物が絶滅の危機にあります。限られた高層湿原だけに自生するナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキモがその種です。土地改良事業等による一方、湿原の乾燥化が進行のため絶滅寸前、風前の灯火で対策が必要なものです。またすでに消滅した植物もあります。食虫植物は植物の仲間でも、とても知恵のある素晴らしい生き方をしている植物です。いまその浜頓別の食虫植物は6種類のうち数種類は現在のままだと絶滅の危機にあります。昨年辛い町が主体となりナガバノモウセンゴケの移植作業に取り組みましたが、小宮定志先生がご指摘のとおり保護対策に関わっては十分に慎重な対応が必要とされています。このようなことを踏まえ浜頓別町自然保護関係者や地元有志に呼びかけ、浜頓別町教育関係者のご協力をいただきながら浜頓別食虫植物研究会を設立するまでに辿り着きました。また入会に際しましても快く申し込んでいただき、18名の会員で会を進めていくことになりました。会員の皆様に御礼と感謝の意を表します。

今後常に会員間の親密を計り、より充実した研究団体ないしは趣味の会として幅広い活動を続け、特に食虫植物の自生地の保護活動に努力して参りたいと思います。また食虫植物の正しい知識の普及とそれを通じて地域文化への貢献を進めるべくまとまっていきたいと願っています。会員の皆様のご意見を十分に取り入れながら会を運営していく所存です。存分なご批判も賜りたいと思います。最後になりましたがこの会の運営のため、大山武氏、寺井春雄氏、佐藤和敏氏、岡本知之氏には快く研究会の委員を引き受けてもらいました。ご協力ありがとうございました。感謝を申し上げます。

浜頓別食虫植物研究会

植松 茂

1997年(平成9年)8月、浜頓別町は国内で4カ所しか自生が確認されていない希少な食虫植物「ナガバノモウセンゴケ」の自生地を、他の場所に移す試みに着手した。今後約1年間経過観察をしたうえで、自生地の移植をさせたい考えである。移植の経過について十分に慎重な対応をお願いしたいところである。

浜頓別町の頓別原野は海岸の国道238号線から陸地へ約10kmも続いている。道北の平地では浅茅野湿原・国立公園サロベツ原生花園と並び、ミズゴケを主とする高層湿原植物が多いことで知られている。湿原の7月に小さい白い花や黄色の咲かせる花は「モウセンゴケ科・タヌキモ科」等食虫植物の仲間である。当原野に自生する「ナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキモ」は日本自然保護協会などのレッドデータブックで絶滅の恐れのある「危急種」とされている希少な食虫植物である。頓別原野以外では尾瀬沼湿原・大雪山高層湿原・サロベツ湿原に見られる貴重な植物だ。他にもピンク・紫・オレンジ色の花をつけるツルコケモモ、タテヤマリンドウ、エゾリンドウ、エゾカンゾウの湿原植物の宝庫であった。土地改良事業等による一方湿原の乾燥化が進行、そのためすでに消滅した植物もある。

20数年前は広範の湿原を形成、目にもあやな彩りで咲いていたが。泥炭地の乾燥化の進行とともに湿原植物は減少と絶滅が進んだ。一部に残った食虫植物は浅い泥沼地や湿ったピートモス上に生き残り、特に、数年前からの湿原排水溝の護岸工事は排水溝に「ナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキモ」の数個の個体数を残すだけである。

食虫植物は植物の仲間でも、知恵のある素晴らしい生き方をしている植物である。いまその浜頓別の食虫植物の何種類は現在のままだと絶滅の危機にある。それは湿原の開拓による乾燥化の進行である。浜頓別の自然のなかに湿原植物は勿論のこと、湿原植物の食虫植物が早急に自生できる環境を作ってあげたいものである。勿論他の植物でもある。

町では、原野湿原の牧草地化やクッチャロ湖周辺のレクリエーション基地としての観光施設を整えている。人為的改変は植物の破壊であり湿原植物の消滅の危険さもある。湿原植物の可憐な美しい花を後世に残す知恵が、私たちの地元に住むものの責務であることを痛感する。

今年も残された頓別原野の湿原に、色とりどりの可憐な湿原植物が危機を背負い美しく咲く季節がやってくる。

浜頓別食虫植物研究会

植松 茂

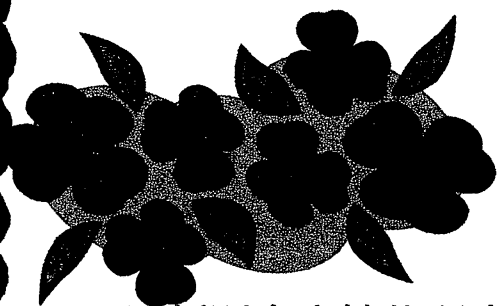
浜頓別町

# 食虫植物研究会会報

第2号

平成10年6月1日

## 絶滅の危機 食虫植物 (2)



浜頓別食虫植物研究会の  
発足を祝す

食虫植物研究会  
会長 小宮 定志

道北の浜頓別町に「浜頓別食虫植物研究会」が設立されたとの朗報を受けまして、心からご同慶に存じます。しかも、その設立の目的がナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキを絶滅から守ろうという切実な願いにあると拝聴し、益々心からの敬服を禁じ得ません。

近年、開発の名を借りて自然破壊が公然と進められている現状をしばしば見せつけられています。そうした風潮の中で、しかも、町レベルで2、3の特殊植物の保護活動を実施することは大変困難を伴うわけです。

今回、浜頓別町で敢てその困難に立ち向われる皆様が「研究会」組織を作られて実践活動を開始されることに心から声援を送ります。

国指定天然記念「成東・東金食虫植物群落」(千葉県)、「宝蔵寺沼ムジナモ自生地」(埼玉県羽生市)や愛知県指定天然記念物「竜町田湿地植物群落(武富町)」、「豊橋市ナガバノイシモチソウ自生地」などでも既に地域ボランティア組織をつくり食虫植物の保護と増殖に取り組んでおり、大きな成果を挙げております。国や県は指定し放しで、保護、管理は地元自治体に一任し何もしてくれません。再三の交渉の末、些少の補助金を出すのがやっと、という現状です。そこで、地域住民によるボランティア活動が大切となって参ります。

自地域における自然資産に誇りを持って、その保護に当たり、子孫に引き継いでゆくため最大のご尽力を切望して止みません。

### ナガバノモウセンゴケの発見史

北海道におけるナガバノモウセンゴケの低地帯からの記録としては1910年(明治43年)7月26日に江別市対雁で採集され、美唄湿原、豊富サロベツ湿原、更に道東の霧多布湿原が記録として残されている。頓別原野での発見は1934年(昭和9年)6月2日、大井次三郎氏にて採集されている。又高地帯の記録としては大雪山沼の原山の湿原で、1951年(昭和26年)8月12日に発見されている。

江別市対雁、美唄湿原のナガバノモウセンゴケは消滅が確認されており、霧多布湿原、頓別原野においては調査されてはいたが再確認に至っていなかった。

昭和53年筆者の踏査結果から頓別原野のナガバノモウセンゴケは44年ぶりに自生地の確認が判明された。

ナガバノモウセンゴケは、国内で4か所確認されている。頓別原野以外では、尾瀬沼湿原・大雪山高層湿原・サロベツ湿原に自生する貴重な食虫植物である。

### ナガバノモウセンゴケの自生環境

この地域(浜頓別町)の海岸一帯は、南部の「斜内山道(北見神威岬)」から北西方向に一直線に60km余りも続き、海岸は5~6mの低砂堤が連なっている。西側は天塩山地の蛇紋岩地帯(宗谷中頓別側)、そして南部は北見山地にあたる北端標高500~800mの山岳域となっている。

この地域の地形は、「ベニヤ原生花園」付近の砂丘と被覆砂丘、浜頓別市街がある浜頓別台地、さらに北方には標高10~30mの浅茅野台地があり、全体に平坦で、一部が緩やかに傾斜している。北オホーツク沿岸では、海岸砂丘の形成により海岸から分離された海跡湖、湖沼が多く点在している。クッチャロ湖はその海跡湖の中でも最大である。このような湖の周辺には河川が多く、流域には小規模な谷底平坦地が形成している。

低地は、ほぼ全域が第4紀層から構成されている。そのうちクッチャロ湖周辺・頓別川流域では、沖積世に形成された湿原が広範囲を占め、深さ2m程度の泥炭層(中位泥炭層と低位泥炭層)が点在している。他方、台地は洪積世の砂礫岩からなる堆積物から構成されている。

この地域(浜頓別町)の気候は、気温が低く冷涼である。浜頓別町の資料によると年平均5℃前後、夏季の5月から9月にかけて15℃前後あり、特に夏季はオホーツク海高気圧の影響による東の風が強く、濃霧の日が多い。冬季の積雪量は内陸部に比べるとかなり少ない。冬季の1月末から3月にかけては、流水が接岸し、気温が著しく低下、特に寒冷である。

このような地形、気候的な特徴と関係して、この地域では北方系の希少な植物が多く見られる。

一方で、この地域は1975年(昭和50年)以後土地改良事業・農用地改良事業等により、湿原・原野の草地化が急激に進行した。特にナガバノモウセンゴケの自生地頓別原野は、1923年に1200haあった湿地面積が1969年には半減し、1980年にはかろうじて2haが残存するのみで、頓別原野はほぼ完全に消滅している。現在の頓別原野の食虫植物(ナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキ)の成育状況は、長さ約100mの明渠上においてピートモス、ミズゴケの中の狭い範囲に成育しているに過ぎない。この地域の食虫植物は、絶滅寸前となっている。

残された湿原の植物も、乾燥化などによって絶滅と減少が進んでいる。北オホーツク地方において、今後野生植物の現状と保全について、また自然環境を深く理解する取り組みについて具体策が早急に展開されることを期待したい。

浜頓別町

# 食虫植物研究会会報

第3号

平成11年6月20日

## ナガバノモウセンゴケの保護対策決定する

~~~~~ 人工池設定工事始まる ~~~~~

一昨年、町では環境庁が公表した「植物版レッドリスト」で絶滅な恐れのある「危惧種」ナガバノモウセンゴケの移植や現自生地全体の分布調査を実施、その後町担当者の対応がないまま1年半が過ぎてしまいました。その間、ナガバノモウセンゴケ保護対策の最大課題である、10年度の植生分布状況調査と人工池設定工事の早期対応は、進展はなく今年度に至りました。

去る5月28日、佐藤町議会議員の力添えにより町担当課長と協議し、自生地（頓別原野）に人工池設定工事のはこびとなりました。具体的な区域設定と工事日程は、保護対策計画作成後早急に工事を進めることになりましたのでお知らせします。保護対策計画作成（人工池設定）については、食虫植物研究会会長小宮先生と札幌在住の食虫植物研究会の会員（外山氏、勝俣氏、佐直氏、植松）で作成にあたりました。ご了承下さい。

今後の予定は、6月中旬に人工池完成予定です。完成後直ち（7月中）に播種・移植を考えています。具体的日程が決定次第お知らせします。ご多忙とは思いますがご協力よろしくお願いいたします。

~~~~~ 佐藤町議会議員ご尽力ありがとうございました。 ~~~~~

今回の食虫植物保護対策・人工池設定の決定については、浜頓別町佐藤町議会議員のご理解とご尽力によるものです。厚くお礼を申し上げます。今後共ご協力とご理解をお願い申し上げます。

### 計報

岡本知之氏は昨年10月30日、脳腫瘍のため急逝されました。氏は浜頓別町立頓別小学校教頭をされ、当浜頓別食虫植物研究会の運営委員としての一人として活躍され、会の会報や発展に大いに貢献されました。心からご冥福をお祈り致します。

## ナガバノモウセンゴケの保護対策に至るまでの経緯

ナガバノモウセンゴケの保護対策に至るまでの経緯についてお知らせします

## ナガバノモウセンゴケの保護対策に至るまでの経緯

- 昭和9年6月22日 大井次三郎氏頓別原野にてナガバノモウセンゴケ採集する。
- 昭和61年8月6日 52年振りに確認。＊最初の再確認は1980年である。
- 平成8年11月16日 ～平成9年2月6日の経緯については別紙とする。
- 平成9年5月20日 稚内開発建設部によるナガバノモウセンゴケ現地確認調査。  
＊時期が早く確認出来ず、6月に再調査することとする。
- 平成9年6月12日 稚内開発建設部によるナガバノモウセンゴケ現地再確認調査。  
＊幼生ながら自生を確認。
- 平成9年6月24日 稚内開発建設部・浜頓別町によるナガバノモウセンゴケ現地確認調査。＊自生の再確認、今後の調査と保全措置について協議。＊明渠に9株確認（A地地区）。
- 平成9年7月1日 稚内開発建設部・浜頓別町関係者（町、教育委員会、自然保護協会）と協議。  
①自生地の防風保安林用地は、ササの密度が濃く乾燥化が進みナガバノモウセンゴケの生息環境の条件低下。②移植試験実施着生の推移を見る。③現自生地全体の分布調査の実施。  
＊協議事項の実施とその成果を確認して保存に努めこととする
- 平成9年7月18日 町有地への試験移植（5株）。
- 平成9年8月29日 植生分布状況調査着手～9月15日まで＊420株確認（B地区）
- 平成9年9月8日 防風林地（植生地）内地下水位測定管設置。
- 平成9年9月12日 農林水産課長・植松で現地調査、移植地視察。
- 平成9年12月20日 農林水産課長と懇談、防風林地（植生地）内に人工クリーク設定合意。設定時期については未定。  
＊平成10年3月まで農林水産課長と数回懇談。人工クリーク設定、今後の対応について協議。設定時期について明言されず。
- 平成10年3月10日 浜頓別食虫植物研究会発足（会員18名）  
＊平成10年8月まで農林水産課長と随時懇談。設定時期について明言されず、今後の対応は食虫植物研究会に一任される。
- 平成10年8月21日～ 自然保護・国有地関係者に保護・早期対応を促す要請。  
平成11年3月10日 ＊文書送付先 北海道開発局環境審議官補佐。  
＊懇談 北海道環境生活部環境室自然環境課長補佐。  
北海道環境生活部環境室自然環境課野生生物室係長。
- 平成10年度 浜頓別町議会議員3名に食虫植物研究会・食虫植物の現状説明と保護・早期対応を促す要請。＊担当者に要請したい。
- 平成11年5月23日 浜頓別町議会議員 佐藤哲夫議員と懇談。食虫植物研究会、食虫植物の現状説明する。
- 平成11年5月28日 佐藤哲夫議員と電話。保護・早期対応について確認。
- 平成11年5月31日 担当者（農林水産課長）と保護・早期対応、人工クリーク設定について決定する。
- 平成11年6月15日 担当者（農林水産課長）と工事について事前協議。

## 頓別原野のナガバノモウセンゴケ（食虫植物）の保護対策

—— 人工クリーク（シュレンケ）の最善の設定をさぐるために ——

### 食虫植物研究会

会長 小宮 定志 (東京)  
外山 雅寛 (江別)  
勝俣 伊夫 (札幌)  
佐直 達夫 (札幌)  
植松 茂 (札幌)

□現状：高山を除き、北海道の食虫植物（ナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキモ）は低地にあっては、絶滅にさらされておりその保護対策が急務とされている。  
石狩湿原では既に絶滅した記録を残しているのは、美瑛市及び江別市幌向等を挙げることができる。

◇人工クリーク（シュレンケ）設定によるナガバノモウセンゴケ（食虫植物）保護対策での基本的な考え方

1. ナガバノモウセンゴケは、自然状態では、すべて高山あるいは、低地の高層湿原に自生しており、シュレンケ設定の場所は、高位泥炭地をはずれた場所に設定した場合は、失敗に帰す可能性が非常に高い。従ってその設定場所は、高位泥炭地が最適である。
2. 永久的にナガバノモウセンゴケを人工クリークの中に保存することは不可能であると思われるが、数十年先を見通したクリークを設定する必要がある。  
クリークの中では、植生の遷移がのろく、設定の方法によっては30～40年間はナガバノモウセンゴケの群落を維持することが可能であろう。（唯一北大の辻井先生による人工クリーク設定と長期観察—サロベツ湿原—という先駆的な研究から推定しても夢ではない。……科学的な人工クリークの設定  
\* 元北大植物園の荒井先生が、新篠津湿原に残した表土掘取り跡（40×20cm）には、5、6年他の植物は何も生えなかった。
3. ナガバノモウセンゴケの移植又は、播種後は、毎年定期的な観察と記録を取ることは欠かすことができない。そのために地元の人々の理解と協力が不可欠である。

4. 種子を利用する場合は、遺伝な同質な元地のものを播く必要がある。

5. 永久に保存を図るための後継者の育成が望まれる。

ナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキモの保存のための人工クリークの設定は、過去にも前例がないが、泥炭地（高位泥炭地）そのものの性質や植物の生育のしかたから考えて、ナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキモの保存のためのクリークの変化を修正するには、多くても100年に3度の改変で済むものと推定される。しかし、クリーク設定場所の周辺環境が牧草地であることから水位の確保が前途多難である。

□人工クリーク（シュレンケ）の設定と観察についての唯一の研究資料

辻井達一著：実験用クリークの植生（1972）（サロベツ総合調査報告書—泥炭地生態 V I I 生物部門 北海道開発局刊行）

### ＝ 内 容 ＝

本報告書は、ある特定の植物の保護を目的とした研究ではなく、人工クリークを放置した場合にその中で植生が年とともにどのような遷移をたどるのかを追求・観察したもので、ナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキモの保存という異なる目的のための人工クリークの設定にも多くの示唆を与えるものとして注目すべき文献で、唯一のものである。

### —— ナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキモ保存のための人工クリーク的设计 ——

◆ナガバノモウセンゴケ保存用人工クリーク設計の基本的な条件

- ① 泥炭地の科学が設計の根底にあること。
- ② ナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキモ本来の生態を満足させるものであること。
- ③ クリークを損傷させることなく定期的な観察ができるようにすること。
- ④ クリークは年とともに微地形的な変化や水位の低下を引き起こすのでその変化を予測し、変化にもかかわらず、ナガバノモウセンゴケ・ヤチコタヌキモが本来の生き方ができるように設計すること。
- ⑤ 設定場所が高位泥炭地であること。